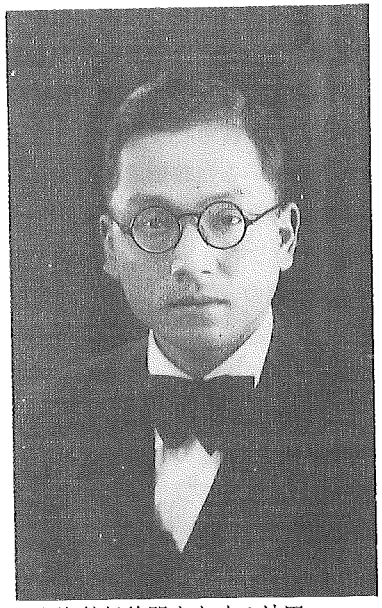
日本における上海史研究の先駆者
沖田　一

高　綱　博　文

戦前日本の上海史研究者としては『上海史話』を著した米沢秀夫は有名であるが，いま一人日本における上海史研究の先駆者である沖田一のことを忘れることはできない。沖田一の上海史研究は，太平洋戦争期に上海において集中的になされた。その研究は上海と日本の関係，上海における日本人の歴史を明らかにし，上海の古蹟を調査し，また上海の地名誌研究にも先鞭をつけた。さらに彼は戦前における最も完備した『上海に関する文献目録』を作成した。しかしながら，こうした沖田一の数多くの研究業績はそのすべてが戦前の上海で刊行されたため，日本の敗戦ともに散逸し，現在それらを見ることは容易ではない。また，戦後は沖田自身が本来の専攻分野であるヘンリー・ジェイムズ研究を中心とした英文学研究に専念したこともあって，彼の上海史研究はほとんど顧みられることはなかった。


上海赴任後間もなくの沖田一

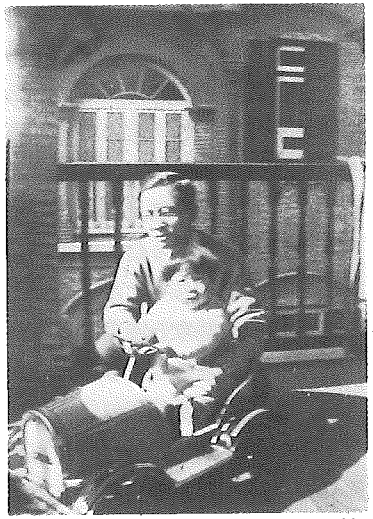
私は数年前から上海における日本居留民の歴史に関心を持ち，史料収集を行い，居留民関係者からの聞き取り調査を行うなかで，私の研究の直接的な先行者として沖田一に注目

するものであった。たまたま，私は沖田と親友で，かつて上海史研究の仲間であった芦澤駿之助の上海関係の蔵書を手に入れる機会があり，その蔵書の中に沖田が芦澤に送った『沖田一著作・目録』(私家版）と題された小冊子を見いだした。この『著作目録』は戦前の部分は「戦争末期に，それまで書いたものの項目をざっと一覧表にし」て沖田が上海から持ち帰ったものをもとにし，これに戦後の著作目録を加えて1983年にとりまとめたものである。また，この『著作目録』には著作ごとに簡単な備忘録（これは1972年になって執筆したと記されている）が付いており，沖田の回想録ともなっている。これによって私ははじめて沖田の経歴と上海史研究の全著作を知り得た。さらに，私は1993年10月城陽市にお住まいの沖田の令夫人沖田綾子様と令嬢沢井遙子様を訪ね，沖田の詳しい経歴と上海時代についての貴重なお話を伺った。また，その際それまで捜し出すことのできなかった彼の上海史研究の著作を拝読することができた。その後も，私は『著作目録』に記載されている彼の上海史関係の著作をできるかぎり捜すよう努めた。単行本として出版された彼の著作はその存在をすべて確かめることはできたが，戦前の上海の新聞・雑誌に掲載されたものはほとんど確認が不可能であった。ただ，彼が多くの上海関係の論考を執筆した『大陸新報』（上海・大陸新報社発行）は1939年１月１日～1945年９月10日までマイクロフィルムで国会図書館に所蔵されていたのでその確認作業をすることができた。しかしながら，彼自身が『著作目録』の記載は「年月がたっているため初期の部分は不備を免れない」と指摘している通り，『大陸新報』でも確認できないものが多数あった。

さて，本稿は沖田一の上海時代と上海史研究の概要を紹介しようとするものである。日本における上海史研究の先駆者たる沖田一の事績と研究業績を掘り起こし見直すことは，沖田と同様に上海史，特に戦前の上海と日本の関係，上海日本居留民の歴史に関心を抱くものにとっては避けて通れないことであろう。

沖田は京都大学で英文学を学んだ後，第一次上海事変後の1933年１月に上海の居留民団立日本高等女学校に英語科主任教諭として赴任した。当時，上海には約27,000名の日本居留民がおり，彼らの多くは共同租界北部の虹口地域に居住していた。沖田が赴任した日本高女は施高塔路

（スコット路）にあり，生徒数は450名ほどであったという。そして，彼は施高塔路44号の英国人の家の二階を借りて住んだ。家主の英国人ハンファーソン（Humpherson）は退役英国陸軍大尉であり，東京の英国大使館に勤務したこともあり，日本語が話せた。同氏は自ら短編小説を執筆するなど詩文に理解があり，沖田と意気投合して，二人は協同で日本情趣豊かな谷崎潤一郎の『春琴抄』と『芦刈』を英訳して出版した。また，彼は日本高女では図書館主任を務め，上海事変後に高女に移管された東亜攻究会（「東亜に関する図書並に研究資料を蒐集し之を公衆に縦覧せしめ以て東亜問題の研究に資すること」を目的に1919年，上海に設立された民間研究団体）の付属文庫とも深い関係ができ，同文庫の外国語文献の目録作成に従事した。一方，1938～39年頃まで，彼は専門の英文学の研究を継続しており，ホイットマンを読み，キーツやスインバーンの作品の翻訳を試みたという。


スコット路の２階のベランダで娘と遊ぶ沖田

沖田は英文学研究を一時止めて本格的に上海史研究を行うようになったのは1941年以後のことであったが，39年頃より「上海特有のことを研究したいと思いはじめて」いたといい，特に「幕末以後の日本と上海の関係に興味をもった」と回想する。彼は初期上海を知る好著であるMontalto de Jesus, *Historic Shanghai* の全訳を行い，また彼の上海関係の最初の論考「上海と英語」を39年９月に発表した。彼はこの頃，家主ハンファーソンが病死したこともあって，上海陸戦隊本部近くの寶楽安路（ダラッチ路）171号に移転した。

1941年２月頃，沖田は上海居留民団立女子商業学校に転任した。この頃から，沖田は上海史研究に専念するようになり，上海史に関する著作・論考を精力的に発表するようになった。戦後，彼は上海史研究の動機を次のように回顧している。「上海時代に，何よりも書くことの大き

な動因になったのは，太平洋戦争だった。戦争のために一時的にも，本筋の英文学から離れざるをえなかった。そして自分が住んでいる上海のことを研究し，それについていろいろ書くことになった」。彼が上海史に関心を持ちはじめた1939年以後，イギリスとアメリカの軍事力は上海から撤退しはじめており，1941年12月８日の太平洋戦争の勃発は上海から英米勢力を駆逐し，1943年租界が中国に「返還」され，上海は事実上日本の植民地となった。沖田の上海史研究は，上海のこうした歴史的転換期と時期を同じくするものであった。

むろん，沖田の上海史研究の背景として太平洋戦争の影響は大きなものであったと考えられるが，彼の上海史研究を直接的に促し，その研究に発表の場を提供したのは親友芦澤駿之助であったことを見逃すことはできない。沖田が芦澤と知り合ったのは1939年頃であり，彼は芦澤駿之助について次のように語っている。「同君は上海で育ち，慶応大学卒業後上海で印刷業（1912年創業の芦澤印刷所ー引用者）をついでいた。この父君という人がいわゆる老上海だった関係上，駿之助君は上海特に在留邦人の歴史に興味をもっていて，私もそれに影響されてしまった」と。

芦澤駿之助が中心となって上海研究を志す同人たちが集まり，1941年春に上海歴史地理研究会が生まれた。その創立の目的は次のようであった。「従来我が国人の上海の経済政治方面に関する研究は甚だ進んでいたが，之を地理的に文化史的に研究し，而も我が国とのつながりに於て研究する処は極めて稀であつて，殊に現地に於ては絶無であり甚だ遺憾とする処であつたが，昨春我々同人相寄り上海歴史地理研究会を組織し，此の方面の研究分野の開拓に志したのである」。41年９月に制定された会則には，研究会の事業として（１）古蹟の調査研究　（２）資料の蒐集（３）研究報告の発行　（４）講演会・研究会・展覧会等の開催が挙げられている。そして，事務局は上海青年団本部内に設けられ，本会への入会資格として上海青年団員たることが規定された。当時，芦澤は上海青年団の文化事業の責任者であった。上海青年団は「勤労奉公大東亜建設の推進力たるを期すに明示する同心団結，共励切磋，勤労奉公は現地国民各自の大東亜戦争に挺身する最も簡明なる実践綱目」とし，それは1939年２月に成立し42年９月に解散した。上海歴史地理研究会は，この上海青年団文化部の外郭団体として発足した。

さて，沖田は女子商業に転任すると校長職務を代行しながら，学校に上海研究文庫を設けて資料の収集に努力した。そして，彼はその上海史研究を上海の地名・路名研究から始めた。その研究の動機を次のように語っている。「来滬当時より，上海に読みにくい地名・街路名が多くあり，之を読み併せてその起源や由来を探る事は単に私に興味ある以外に，大方に寄与する処もあろう・・・今上海戦当時，京都の某博士から閘北の語源を聞かれ，即答が出来なくて大いに恥じ，益々研究を刺激されたのでありますが，やはり参考書はない」。そこで，沖田は東亜攻究文庫や工部局図書館で資料を集めて，上海の地名・路名の意義，起源，由来を探ることによって上海史研究への一拠点を築こうとした。当時の上海の路名は上海租界の繁栄に貢献した英米人，特に工部局関係の英国人を記念するものが多く，彼はこの研究のために共同租界・フランス租界の歴史を調べ，英文の資料を相当に収集したという。彼はこの研究を勤務先の学校会誌や上海青年団機関誌に発表したが，また芦澤駿之助の斡旋で『上海毎日新聞』に一般の人にわかりやすく解説した「上海の路名物語」を連載したという。1941年６月には，沖田はそれまでの路名・地名に関する論文を集成し，それに上海の古地図と虞姫墩探訪記・徐家滙図書館訪問記を加えた『上海地名誌』を上海歴史地理研究会から刊行した。この本は印刷所を経営する芦澤駿之助の好意により出版された非売品であり，希望者には無料で配布された。『上海地名誌』は地名から見た上海史ともいうべき労作であった。

上海地理歴史研究会ができると，日曜ごとに上海の古蹟を訪ね，浦東の日本人墓地，廟，外国人墓地などをくまなく調べたという。『上海地名誌』に収録されている「虞姫廟」探訪記から，この古蹟調査の様子は窺うことはできる。それによると，日本人にはほとんど知られていないが，中国側の案内書に簡単ながら「虞姫廟」の項がある。沖田は『同治上海県志』にそれに関する記載を発見して，是非行ってみようということになった。そこで，1941年４月23日（日曜日）朝８時，沖田一・芦澤駿之助・民団の西原・第四国民学校の鈴木・女子商業学校の奥山の５名は，芦澤宅に集合し地図・カメラなどの携帯品を持ち自動車で出発した。途中で道案内を依頼した市政府滬西分局に勤務の銭寶栄が同乗した。車は県志類でその位置を調べておいた蘇州河畔を目指した。いよいよ目的

の「虞姫廟」を目にした沖田は，「此処は一人や二人で来れるとこではない。もう一生二度と来れぬかも知れぬ。文献のみで知つて，実物を見た事のない私は，あの赤煉瓦の廟がそれだと聞いて，近づくにつれて恥しながら胸がどきどきする。どんな物があるか，どんな古記録が残つて居るか，久しい前からの懸案であるだけ，好奇心はいよいよ研ぎ澄まされて，一行のトップを切って進む」と興奮気味にその様子を記録している。

同研究会による上海古蹟調査は，日中戦争下のこともあり危ないことも数回あったが，芦澤が上海語に堪能なこともあって何とか切り抜けたという。この調査については，沖田が芦澤の斡旋で『大陸新報』に「上海古蹟探訪記」を連載したというが，いまのところ見いだすことはできない。また，この調査の成果は芦澤によって「上海古蹟研究」としてまとめられ研究会機関誌『上海研究』第１輯に掲載された。

1941年夏に休暇をもらって帰国した沖田は，さきに刊行した『上海地名誌』を持参して京都に新村出を訪ねた。新村出は著名な言語学者であり，沖田は京大在学中に言語学概論の講義を聞いたことがあった。また新村は上海に深い関心を持ち，沖田に自分の著書『遠西叢考』を示し，上海についていろいろ尋ねノートにメモをしたという。『遠西叢考』には「往古に於ける上海と日本との史的関係」・「元治元年に於ける幕吏の上海視察記」の論考が収められているが，前者は遣唐使・漂流譚・元寇とかかわらせて日本と上海の関係を概観したものであり，後者は文久３（1863）年の幕吏の上海視察の復命書を紹介したものである。これらの論考は問題意識や研究対象の選定において，沖田のその後の上海史研究に一つの模範を提供したものと思われる。また，新村は岸田吟香の『呉淞日記』を紹介するなど，上海史の重要な史料や情報を沖田に与えた。沖田は上海に帰る途中に長崎高等商業学校（現，長崎大学）の武藤長蔵を訪ねた。この訪問は，新村の『遠西叢考』に紹介されていた長崎高商図書館所蔵の長崎会所商人松田屋伴吉「唐国渡海日記」を閲覧することを目的としていた。この「唐国渡海日記」は『上海研究』第１輯の資料篇に収録された。

沖田は1941年11月に『大陸新報』に「紅楓女史」と題する記事を書いた。これは閘北の日本人墓地に「紅楓女史」と刻んだ２メートルほどの

天然石の墓碑があったが，身元は不詳であった。沖田はこの碑を何度も訪ね，上海東本願寺別院の過去帳を閲覧するなどの努力で，「紅楓女史」とは明治初年に上海に渡った南画家安田老山の妻伊原愛であることをつきとめた。この記事により沖田は内山完造に昼食をご馳走になったという。

同年12月８日には太平洋戦争が勃発し，上海における100年続いたイギリスの支配は終焉した。沖田はこの前後を挟んで，上海で発行された英字週刊紙ノースチャイナ・ヘラルド（*The North China Herald*）を読むことに熱中していた。ヘラルドは創刊されたのは1850年であり，「上海史，特に上海邦人史を研究して居る私としては」この新聞の古い号を見ることは必要であったという。同紙が簡単に閲覧できるところは，公開の The North China Branch of Royal Asiatic Society（中国名，亜州文会）の図書館であった。ここは博物館と図書館からなる立派な建物であり，虹口からも近くて通うのに便利であった。この図書館に所蔵されていたヘラルド紙は1850年８月３日付の創刊号～56年前半までと，1857～59年の期間のものである。これでは部分的にしか調べられないので，ヘラルド本社に1856年後半と1860年代の同紙を閲覧に学校勤務のかたわら通ったという。しかし，太平洋戦争が勃発し，ヘラルド社は「敵性」であったため閉鎖され閲覧ができなくなった。そこで，徐家滙教会付属図書館に照会したところヘラルド紙が1850～66年まで所蔵されていることがわかり，そこに通い閲覧したという。

沖田のノースチャイナ・ヘラルド紙による研究成果は，自ら「未定稿」・「中間報告」と呼ぶ『上海邦人史研究』（上海歴史地理研究会刊，1942年５月）にまとめられた。同書は30部しか作成されず，現在東洋文庫に沖田寄贈の第13号が所蔵されている。幕末の日本と上海の関係に関心を持ってヘラルド紙を熟読した沖田は，同紙に記載されているオトソンが尾張の漂流民音吉（日本音吉）であり，音吉が上海に居住した最初の日本人であることをつきとめ，その関係史料を収集し，その事績を追跡した。また，ヘラルド紙より上海港の出入船舶，乗客名簿を調べ，幕末～明治初期における日本船・日本人の来滬状況を明らかにした。沖田は漂流民音吉に対して，音吉が澳門において宣教師ギュツラフに協力して英文聖書を和訳したところの日本の英学・文化史上忘れてはならぬ人

物であるとの高い評価を与え，戦後においてもいくどか論及している。また，沖田はヘラルド紙に1862（文久２）年に江戸幕府がはじめて上海に派遣した官船千歳丸の記事を見つけて興奮した。彼は千歳丸は「日本側が得た主として精神的収穫，欧米人の対日観への影響，中国人への日本紹介等の面で重視すべき史実」であると考え，その後邦文・欧文・中文の関係史料を網羅的に収集した。この千歳丸関係史料は戦時中，京都大学の東洋史学者矢野仁一に預けられ，戦後それをもらい受けた沖田は「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」という論考にまとめて『東洋史研究』に発表した。

1942年２月，上海歴史地理研究会の最初で最後の機関誌『上海研究』第１輯が内山書店から出版された。そこに沖田は(１)上海への日本人漂流民　(２)上海の外国商人，特にタウンゼント・ハリス　(３)上海ー長崎の定期連絡船アゾフ号など　(４)岡田穆『滬呉日記』から見た1872・73年の上海を，主な内容とした「上海史話」と題された論考を発表した。

1942年は上海開港100年にあたるというので，東亜同文書院が中心となって記念展覧会が開催されたが，沖田もこれに協力して図書を中心として出品できる資料はすべて提出したという。同年９月に沖田は上海居留民団立学校を退職し，11月に日本大使館により設立された華中興亜資料調査所の調査員として勤務することになった。華中興亜資料調査所とは日本軍に接収されたもとThe North China Branch of Royal Asiatic Societyであった。ここに勤めるまで暇ができたので，『大陸新報』に「滬上史談」という上海に関する史的随筆を連載した。これはその年の12月に増補改訂され，新たな稿を加えて単行本『滬上史談』にまとめられ，大陸新報社発刊の「大陸叢書第二輯」として出版された。その「はしがき」で沖田は次のように述べている。「私がかうした随筆を書いた理由は，これによつて上海在住の邦人の方に上海に愛着を持つて頂くやうになつて欲しいためであります。住む土地を愛してこそその地の本当の建設があるからであります。そして上海を愛好するには，この地の歴史を知るに如くものはないのであります」。ここに，沖田の上海史研究の動機が素直に語られているといえよう。また，これは芦澤駿之助など上海歴史地理研究会の同人たちの上海史研究の動機も同様であったものと思われる。すなわち，彼らは上海を永住の土地と思い定め，上海史を

いわば彼らの郷土史として研究しようとするものであった。そして，彼らの上海史研究は日中戦争，太平洋戦争の進展とともに上海に急増した「いかにして速く金をつかもうかという」一旗組の日本人に対する反感によって支えられていた。

さて，沖田は，1941年６月に設立された上海市政研究会の委員でもあった。同研究会は自らその小史を次のように総括する。「昭和16年６月１日設立，同18年８月14日解散，短期間に能く激動期上海の転変に対応し，租界問題を中心とする上海処理に当り，之を通じて在上海同胞知識層の啓発に寄与するところが多かった」と。上海市政研究会は芦澤駿之助が中心となり，沖田一，西村捨也，高橋良三その他10人余りのメンバーから構成された。同研究会の目的は，日本軍が上海市の行政を接収した以上，いかに上海を治めるかが問題となり，それに関する資料の提供と勧告とにあった。当時，上海市政研究会は『文化資料』という会誌を発行しており，それに42年末までに刊行された上海関係図書目録である「上海関係資料目録稿」が連載された。さらに，同研究会は「新発見の資料を多く加へ，又可成多くのものに解題を施し・・・特に邦文及び欧文の部は内容が豊富になつた」ものとして43年５月までに『上海に関する文献目録』の編纂を完了し，翌年５月に華中鉄道から刊行した。『文献目録』の序文は上海共同租界市参事会議長・上海市政研究会会長岡崎勝男が書いており，それによると本書は研究会設立時より「租界百年記念として出版の計画」されていたこと，「主として編輯の責任を果たした沖田一氏，西村捨也氏」とある。主に沖田の努力によって完成した『文献目録』は，戦前の上海関係文献目録としては最も完備したものであるが，そこに記載されたもので現在すでに目にすることのできない文献も数多い。

ところで，沖田は米沢秀夫との親交があったと思われ，米沢が出していた雑誌『江南地史叢考』にも投稿している。沖田は「当時上海で私たちのような研究をしていたのは，米沢氏ぐらいのものだった」といい，米沢の上海史研究を高く評価していた。米沢がこれまで新聞雑誌に書いたものを集録し，巻末に文献解題を付けて『上海史話』(1942年７月刊)を出版するとすぐに書評を書き，「上海通史ではないが，上海全般に触れている好著」と紹介したという。沖田と米沢はともに幕末以降の上海

と日本の関係，上海邦人発展史に主要な関心を向け，互いに強く意識しながら上海史研究をしていたものと思われる。

1943年夏，沖田はこれまで集めたすべての史料を利用して自分の上海史研究を大成すべく『日本と上海』という著書を一気呵成に書き上げた。本書は同年12月に大陸新報社から発行され，2，3千部がすぐに売り切れたという。本書は「上海百年史」と「上海邦人史」の2部から構成されている。前者はアヘン戦争下の英軍による上海占領から1943年の租界の中国側への「返還」までの上海史を概述した小論（全44頁）であり，後者は本書の主要部分である幕末から日清戦争までの「上海邦人史」（全289頁）である。「上海百年史」が小論に終わった理由として沖田は「準備未了と時間的に制限されたため」としており，将来「政治，社会経済，文化の綜合的見地に立ち，上海が影響される処最も大であった事変，内乱乃至戦争の波動の様相に於て眺めた新上海史」をまとめたいと決意を表明している。また，沖田は上海邦人史は「其の纏められたものは絶無と云つてよい」とし，幕末以前の日本と江南との交渉史では多数の有益な研究があるが，「然るに幕末も日支交渉或は対上海関係に就ては，それが特殊な意味を持つ重要なものであるに係らず，部分的研究があるのみで，而も大部分経済史的に眺められたものである」とし，本書における「上海邦人史」は「兎も角新資料を多く加へ，綜合し得た点」に自ら長所を見いだしている。そして，「上海邦人史」が日清戦争までで終わっていることは，「其の後のことは私に興味がないと云ふより，以後の邦人史は一般上海史中に含まれると考へるからである」とその理由を述べている。すなわち，沖田は，日清戦争までは日本の対上海関係，日本人の活動はほとんど上海史に影響を与えず，「上海邦人史だけの歩みを続けた」が，それ以後は日本の上海に対する役割は急増し，「日本を除外して上海史を眺めることは不可能である」と主張するものであった。さらに，「上海百年史」が小論にとどまり，「上海邦人史」が日清戦争前で終わっている理由としては，当時の厳しい検閲とも関係しているのではないかと推測される。例えば，本書でも，ゴルドンが太平天国の乱を平定するのに貢献があったという部分が，時局にふさわしくないというので，総領事から新聞社が削除を命じられたという。今日においても，日清戦争前の上海の日本居留民に関する史料は極めて限られており，

沖田が当時閲覧し得た史料すらすべて見いだすことは困難である。そうした意味で本「上海邦人史」は研究史上の先駆性を持つだけでなく，現在では高い史料的価値を備えているといえる。

沖田は1945年8月まで華中興亜資料調査所に勤務していたが，一時上海の憲兵隊に通訳として徴用されたこともあったという。敗戦後は上海ではやるべき仕事もなく，そのうちに日本居留民10万人は日僑管理処より集中生活が命じられ，沖田とその家族は狄思威路の南端嘉興路に移った。そこでは彼は日本居留民の教育団体がつくった寺子屋式学校や個人に英語を教えて生計をたてた。翌年3月，沖田は13年間の上海生活を終え，日本へ引き揚げた。

なお，沖田は戦後においてもいくつかの上海史関係の論文・小説・随筆を残しているが，それらは戦前の研究成果や体験に依拠するものであり，沖田の上海史研究は彼の上海時代とともに終わりを告げたといえよう。

[沖田一・年譜]

1905年	（明治38）	2月	鳥取県東伯郡上北条村下古川に誕生。
1918年	（大正7）	3月	下古川小学校卒業。
1922年	（大正11）	3月	鳥取県立倉吉中学校第4学年修了。
1925年	（大正14）	3月	鳥取県立松江高等学校理科甲類卒業。
		12月	愛知県刈谷高等女学校の教諭となる（～27年3月）。
1927年	（昭和2）	4月	京都大学文学部文学科英文専攻に入学。
1930年	（昭和5）	3月	同上卒業。
1933年	（昭和8）	1月	上海居留民団立日本高等女学校の英語科主任教諭として上海に赴任。
1941年	（昭和16）	2月	上海居留民団立女子商業学校に転任。
1942年	（昭和17）	9月	上海居留民団立女子商業学校を退職。
1943年	（昭和18）	11月	華中興亜資料調査所に調査員として勤務（～45年8月）。
1946年	（昭和21）	3月	上海より引き揚げ，郷里の鳥取県東伯郡上北条村下古川に住む。
		6月	鳥取県内務部渉外業務局に勤務。

1947年（昭和22）1月　大阪女子医科大学予科教授に就任。
1951年（昭和26）3月　大阪女子医科大学予科が解散して，西京大学女子短期大学に転任し助教授に就任。
1955年（昭和30）9月　西京大学（1959年に京都府立大学に改称）に転任し助教授に就任。
1965年（昭和40）6月　京都府立大学家政学部教授に就任。
1968年（昭和43）2月　同上大学教授退職。
4月　親和女子大学英文科教授に就任。
1970年（昭和45）3月　同上大学教授退職。
4月　同上大学非常勤講師に就任。
1976年（昭和51）2月　龍谷大学英文科教授に就任。
1981年（昭和56）2月　同上大学教授退職。
1985年（昭和60）11月　死去。

［この年譜は沖田が龍谷大学に提出した履歴書と澤井遙子氏の御協力により作成した。］

［沖田一・上海関係著作目録］

（1）「上海と英語」（『英語青年』研究社，1939年9月）*
（2）「ピジン・イングリス」（『上海日本高女校友誌』第17号，1939年）
（3）「上海路名考」（『上海日本女子商業学校会誌』創刊号，1941年2月）
（4）「上海路名考」（『上海青年』上海青年団，第7号，1941年3月）
（5）「上海の路名物語」全7回（『上海毎日新聞』1941年5月）
（6）「上海古蹟探訪記」全8回（『大陸新報』1941年7月）
（7）『上海地名誌』（上海歴史地理研究会，1941年6月，全126頁）*
自序　凡例　第1章　城内　第2章　南市　第3章　旧英租界　第4章　仏蘭西租界　第5章　滬西　第6章　虹口　第7章　楊樹浦　第8章　閘北　第9章　新市街
付録　虞姫墩探訪記・徐家滙図書館訪問記・参考文献
（8）「上海異聞」（『揚子江』揚子江発行所，1941年8月号）*
（9）「上海邦人発展史」全17回（『上海毎日新聞』1941年9月）
(10)「上海県志と竹枝詞」全2回（『上海毎日新聞』1941年9月）

(11)「紅楓女史」（『大陸新報』1941年11月9日，15日）*
(12)「幕末と上海」（『上海教育』創刊号，1941年12月）
(13)「五代友厚と上海」（『上海』創刊号，1942年1月）
(14)「新嘉坡邦人の開祖日本音吉」（『大陸新報』1942年2月17日，18日，19日，20日）*
(15)『上海研究』第1輯（上海歴史地理研究会，1942年2月，全163頁）*
上海古蹟研究・・・芦澤駿之助
上海史話・・・沖田　一
（1）上海漂流記　（2）日本開国と上海商人　（3）初期の日支連絡船　（4）明治5・6年の上海
上海邦人医界明治年史・・・坂田敏雄
資料　松田屋伴吉「唐国渡海日記」，安田老山書簡
(16)「千歳丸の史実」全3回（『大陸新報』1942年3月）
(17)『上海邦人史研究』（上海歴史地理研究会，1942年5月，全80頁）*
1．はしがき　2．日本音吉　3．ノース・チャイナ・ヘラルドの邦人関係記事
(18)「滬上史談」（『大陸新報』1942年9月28日，29日，10月2日，3日，6日，10日，11日，12日，13日，14日，22日，23日，24日，28日，29日，30日，31日，11月1日）*
(19)「シーボルトの日記ー四馬路から発見ー」（『大陸新報』1942年11月12日，15日，16日）*
(20) Hundred Years' Story of Garden Bridge told by Historian, Shanghai Times 1941
(21)（書評）「米沢秀夫氏著『上海史話』」（『江南史地叢考』第1号，1942年10月）
(22)「上海関係資料目録稿」（『文化資料』上海市政研究会，1942年10月，12月，43年3月）
(23)『滬上史談ー上海に関する史的随筆ー』（大陸新報社，1942年，全106頁）*
1．口絵　2．上海異聞　3．ガーデン・ブリッジの由来　4．和英語林集成　5．千歳丸の新文献　6．ライシアム劇場　7．上海五十年祭　8．日本人墓地　9．廣肇医院

10. 外人墓地内の邦人の墓　11. 長崎と上海との関係

(24)「上海租界回想」(『大陸新報』1943年7月30日，31日)*

(25)「上海と云ふ言葉」(『婦人大陸』1943年12月)

(26)「八戸弘光」(『江南史地叢考』第2号，1943年12月)

(27)『日本と上海』(大陸新報社，1943年12月，全333頁)*

はしがき

上海百年史

第1章　上海占領　第2章　租界の開設　第3章　小刀会の乱　第4章　太平天国　第5章　租界の繁栄　第6章　日清戦争　第7章　日露戦争　第8章　第一次欧州大戦　第9章　上海事変　第10章　支那事変ー大東亜戦争

上海邦人史

前編　幕末時代

第1章　漂流民　第2章　千歳丸（一）　第3章　千歳丸（二）　第4章　健順丸　第5章　ガンジス号　第6章　上海渡航者　第7章　結語

後編　明治時代

第1章　黎明　第2章　初期の邦商　第3章　文化　第4章　邦人関係一般　第5章　結語

(28)「上海百年史」(『上海の文化』上海市政研究会，1944年3月)

(29)『上海に関する文献目録』(上海市政研究会編，華中鉄道刊，1944年5月，全155頁)*

1．邦文の部　2．華文の部　3．欧文の部　4．新聞雑誌の部

それぞれ以下のように細分されている。

（1）一般　案内　（2）歴史　地理　（3）産業　交通　労働　（4）商業　貿易　（5）金融　経済　（6）法制　租界問題　（7）教育　文化　（8）言語　（9）事変関係　(10) 雑

(30)（書評）「小畠実著『江南博物誌』」(『大陸新報』1945年1月7日)*

(31)「上海の絵」(『大陸新報』1945年4月)

(32)「上海における関口隆正」(『大陸新報』1945年6月)

(33)「往時の上海渡航」(『新生』1946年3月)

(34)「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」(『東洋史研究』第10巻第1号，第10号第3号，1947年12月，48年7月)*

(35)（小説）「酔蟹」(『サンデー毎日』別冊「春の大衆文芸」，1950年3月)*

(36)「緑蔭随想」(『ブディスト・マガジン』西本願寺刊，1951年8月)*

(37)（小説）「日本音吉」全3回（『ブディスト・マガジン』1951年9月～12月)*

(38)「ガーデン・ブリッジと鱸魚」(『近畿文学』第2号，1952年10月)

(39)（小説）「馬と軍艦」(『近畿文学』第3号，1953年1月)

(40)「江南の味覚」(西京大学『碧』第5号，1953年1月)

(41)「江南の巡礼」(『ブディスト・マガジン』1953年2月)*

(42)「上海にある日本人の墓」(『ブディスト・マガジン』1953年4月)*

(43)「英学に及ぼした上海の影響」(西京大学学術報告『人文』第3号，1953年，全11頁)*

（1）渡航の英学関係者　（2）英書の漢訳本　（3）英語辞書　（4）印刷術

(44)「J.M.Ottosonのこと――日本英文学史の一断面――」(『英語青年』1977年7月)*

(45)「ヘボンの『和英語林集成』――岸田吟香の『呉淞日記』より――」(『新教』1978年2月)

(46)「虞美人の墓」(『歴史と人物』1979年7月)*

(47)「続・J.M.Ottosonのこと――日本英文学史の一断面――」(『英語青年』1980年1月)*

(48)「ノースチャイナ・ヘラルドの幕末時の日本関係記事」(『龍谷大学論集』第417号，1980年10月，全48頁)*

（1）千歳丸の件　（2）漂流民音吉の件　（3）健順丸の件　（4）慶応元年柴田日向守の欧行の件　（5）薩摩藩欧州留学生の帰国途上寄港の件　（6）日本淑女がフランス人に伴われ上海に渡航した件　（7）ヘボン夫妻の上海到着の件　（8）ガンジス号の上海到着の件　（9）パリ万国博覧会に参列する徳川民部卿一行の寄港の件　(10) 幕末英米が日本に売却した船舶一覧　(11) 肥後藩の万里丸の修理のため上海に入港の件　(12) ウィ

リアム・ブラムセンが『和英語林集成』改訂版への批評の件

［この目録は『沖田一・著作目録』より作成したが，著作の実物を確認して記載が誤っているものは訂正した。＊は著作を確認し得たものである。］

付記：現在，私が進めている上海の日本居留民社会史研究はいまでも上海を愛されている多くの居留民関係者の御好意によって支えられている。故沖田一の御家族のお住まいについは甫喜山精治氏に調べていただいた。『沖田一・著作目録』をはじめとして数十冊の故芦澤駿之助所蔵の貴重な上海関係の蔵書は芦澤玖美氏より拝借している。上海時代の沖田の写真は澤井遙子氏より拝借した。また，沖田一の履歴書・業績目録を入手するのに龍谷大学の小瀬一氏にお世話になった。

本稿で言及した新村出・米沢秀夫・芦澤駿之助の上海研究については，野沢豊「戦前日本の上海研究」（『近きに在りて』第20号，1991年）を参照されたい。